て和らかなる聲也
律の音」律ハ陽聲にてこハく上りたる聲也
二〇三 吳竹」淡竹(ハチク)の類葉細く黃淵にして長さ數尺にすぎず其初め吳國より渡りし竹なりといふ
かは竹」常に皮ある竹なれバ皮竹の義なるべし借字に河竹とも書けり
二〇三 退凡下乘の云々」退凡ハ凡人を退くるの義也下乘の卒都婆ハ山下に立つ故に外也退凡のハ山中に立つ故に內也
二〇四 おほくハ不吉の例也」花山院ハわづかに

招魂の法をば行ふ次第あり、これハ鶴なり、万葉集の長歌に、霞たつながき春日のなどつゞけたり、鶴鳥もよぶこ鳥のとざまにかよひてきこゆ、

〔三三〕萬の事ハたのむべからず、おろかなる人は、ふかく物をたのむ故に(共カヒナキ片ハ)恨いかることあり、いきほひありとてたのむべからず、こはき物まづほろぶ、財れほしとてたのむべからず、時のまに失ひやすし、才ありとて恃むべからず、孔子も時にあハず、德有りとてたのむべからず、顏回も不幸なりき、君の寵をもたのむべからず、誅をうくるとすみやかなり、奴從へりとてたのむべからず、うむきはしる事あり、人の志をもたのむべからず、必變ず、約をも恃むべからず、信あることすく

二年にておりさせ給ひ後三條院ハ此行幸のあくる年すべらせ給ひて又の年崩御也かやうの事を不吉の例といふにや
二〇五 勅勘の所」天子の御勘當を受けたる所
靱」矢をいる、器今の空穗の如きもの也と
世の中さわが〳〵き時」此詞ハ古へ多く疫癘流行の事にいへり五條の天神」少彦名の神也此神疾病を治る事日本紀に見にたり今此社に靱をかけらる、ハ疾病を治むべき神のをこたりありとの義にて勅勘の

か〳〵身をも人をも賴まざれバ、是なる時はよろこび、非なるときはうらみず、左右ひろければさはらず、前後とほければ塞がらず、せばき時はひしげくだく、心を用る事少〳〵きにして、きび〳〵き時は、物にさかひあらそひてやぶる(ナシ)、ゆるく〳〵てやはらかなる時は、一毛も損ぜず、人は天地(間)の靈(長)なり、天地はかぎる所なし、人の性かんぞ(コレト)ことならん、寬大にしてきはまらざる時は、喜怒是(ノ本心)にさはらず〳〵て、(外ヨリクル)ものゝためにわづらはず、

〔三四〕秋の月はかぎりなくめでたき物なり、いつとても月はかくこそあれとて、(齊夏冬ノ月ト)おもひわかざらん人は、無下に心うかるべき事なり、

○萬の事ハたのむべからず　○秋の月ハかぎりなくめでたき物なり

意なるべ〜
看督長」撿非違使廳の下司也
三〇六 拷器」打たゝくときの犯人を〜ばりつくる器也拷ハ打なりと字書に見にたり
三〇七 大師勸請の起請」慈恵大師の女難にあひ玉ひ〜とき山門にて佛神勸請の起請をかき始玉ひける也起請いうけをたつるとよめりされバ已がいつはりなき證據に佛神を請人にたて、人に心易く思はするゑ也」法曹」律令をよく知りて沙汰〜行ふ明法家也
又法令にハ水火に云々」水火ハ天地の間に滿ちわたりたれハ穢る、事なし〜これも火起請などいひて用ふる人の迷へる事をいへり
中門にて」廳の屋の中門に出て評定ある也敷瓦なる故にはまゆかをおきて其上に居給ふなるべ〜中門ハ正殿の左右の廊に設けたる門也俗に切通といふも此ことなり
大理」撿非違使廳の別當の唐名也
はまゆか」倚子などのやうにて高欄あるもの也
にれ」牛の口よりね

〔三一五〕御前の火爐に火をおく時は、火ば〜てはさむとな〜、かハらけよりたゞちにうつすべ〜、さればころびおちぬやうに心得て、炭をつむべきなり、八幡の御幸に、供奉の人淨衣を着て、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人〜ゞき物を着たる日ハ、火バ〜を用るくる〜からずと申されけり、

〔三一六〕想夫戀といふ樂ハ、女男をこふる故の名にハあらず、本ハ相府蓮文字のかよへるなり、晉の王儉大臣と〜て、家にはちすをうゑて愛せ〜時の樂なり、これより大臣を蓮府といふ、廻忽も廻鶻なり、廻鶻國とて夷のこハき國あり、ゑの夷漢に伏〜て後に來りて、おのれが國の樂を奏せ〜なり、

〔三一七〕平宣時朝臣老の後(むか〜がたりに、最明寺入道時頼あるよ

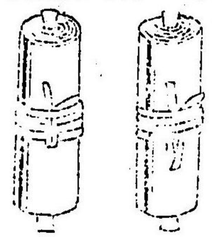
ひの間に(已レヨ)よばるゝ事あり〜に、やがて(參ラン)と申ながら、直垂のなくて兎角(延引)せ〜程に、又使來りて、直垂などのさふらハぬに(即)や(アラン)、夜かれぬことやう(ナル体)なりとも、とく(來マセ)とあり〜かば、おへた(レシホ)る直垂(ヲ若)、うち〜(内々)のまゝにてまかりたり〜に、銚子(最明寺殿)に小土器とりうへてもて出て、此酒をひとりたうべんが、さう〜〜(寂々)けれバ申つる也、さかなこゝろなけれ(給)、人は(寢)〜づまりぬらん、さり(ア)ぬべき物やあると、いづくまでも求め給へとあり〜かば、〜ろくさ〜て、くまぐ〜(隈々)を求〜ほどに、臺所の棚に、小土器に紙燭差味噌みろの少〜つきたるを見出て、是ぞもとめ得てさふらふと申〜かば、事たりなむとて(略ニ)、心よく數献に及びて、興にいられ侍りき、其世にハかく(こそ)侍〜かと申されき、

○御前の火爐に　○想夫戀といふ樂ハ　○平宣時朝臣老の後

〔三一九〕最明寺入道、鶴岡の社參の次に、足利左馬入道（義氏）の許へ、先使をつかハ〜て立いられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一献にうちあはび（鰒）、二献にかいもち（搔餅）、三献にかいもち（萩ノ餅）ひにてやみぬ、うの座にハ、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて座せられけり、さて（最明寺殿）年毎にたまはる、足利の染物（中間タクミ俄ニテ仰用ル）、心もとなく候と申されければ、（左馬入道）用意〜さふらふとて、色々のうめ物三十、（自身ノ）前にて女房どもに、小袖にてうぜさせて、（時頼歸館ノ）後につかハされけり、其時見たる人のちかくまで（調）侍しが、語り侍〜也、

〔三二〇〕或大福長者のいはく、人は萬をさ〜おきて、ひたふるに（利）徳をつくべき也、貧くては生るかひなし、富るのみを人とす、

なの先をはさむ圖



くる〜ときてわりたるものをかみ出すをにれ打かむといふ

ことわりいとをかし云々」實ハいよ〜僻事をかさぬれバ惡き義ながら當分の利口の面白さとの意なるべし

徳をつかんと思はゞ、すべからく、先其心づかひを修行すべし、其心（付）といふは、他のことにあらず、人間常住（ナルモノト）のおもひに住して、かりにも無常を觀ずるとおかれ、是第一の用心なり、次に萬事の用をかおふべからず、人の世にある自他（用）につけて、所願無量あり、（我所願ノ）欲に〜たがひて、（其）志をとげむとおもはゞ、百萬の錢（其錢ヲ）ありといふとも、暫も住すべからず、所願はやむときなし、財はつくる期あり、限ある財をもちて、限なき願に〜たがふ事得べからず、所願心にきざすとあらば、我をほろぼすべき惡念來れりと、かたくつゝしみおろれて、小要をもおすべからず、次に錢を奴のごとく〜て、遣ひ用る物と〜らば、永く貧苦をまぬがるべからず、君のごとく神の如くおろれ尊み

ことわりいとをかし云々」實ハいよ〜僻事をかさぬれバ惡き義ながら當分の利口の面白さとの意なるべし

喚子鳥」此鳥ハ古今集に「遠近のたつきも〜らぬ山中におぼつかなくもよぶ子鳥かな」とよめる歌に出つ

いかなる鳥ともさだかに云々」古今集の

三烏也傳授なくてハ知られぬなどいひて古へより書にあらはさぬ故也
万葉集の長歌」第一卷に見えたり幸ニ讃岐國安益郡之時軍丁見レ山作歌とあり」
鵲烏も喚子烏の云々」眞言書によぶこ烏といふハ鵲の色なる上に又万葉にぬばたま烏も春日になく心あれバ喚子烏と通じて聞ゆると也
万の事ハ云々」此一節ハ通章の大意なる事を知るべ〜
孔子も云々」孔子周末氣運の衰へたる時に出給へバ終に君子の位を得給はず〜て卒〜給ふ
顔回も云々」論語ニ顔回ハ不幸短命ニシテ死スといへり
奴從へりとて云々」是ハ奴僕の主人をあざむくに士卒の心を變ド欲となることをもこめていへり
人の志をも云々」朋友智音の信を變ずる事をいへり
約をも云々」是ハ朋友の事をいふに似たれど上に既に朋友の事をいへバ此ハたゞ男女の間の事と見るべ〜
是なる時ハよろこび」是ハ我心にかなふ

て、(ワレニ)〜たがへ用るとおかれ、次に耻にのぞむといふとも、怒りうらむる事なかれ、次に正直に〜て、約をかたくすべ〜、此義を守りて、利をもとめむ人は、富の來ると(ヤスクシテ)火のかはけるにつき、水のくだれるに〜たがふが如くあるべ〜、錢つもりて盡ざる時は、宴飲聲色をこと〻せず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこ〜なへにやすくたの〜と申き、抑人ハ、所願を成ぜんが爲に財を求む、錢を財とすることハ、願ひを長かなふるが故也、所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらんハ、またく貧者とおなじ、何をか樂とせん、此(大福長者ノ條ニ云ヒタル)おきてハ、全だ人間の望をたちて、貧をうれふべからずと聞こたり、欲を捉成〜て樂〜ひとせんよりは、〜かじ財おからんにハ、癰疽をやむ者水にあらひて、(北熱氣ヲ冷スヲ)たの〜びとせんよりハ、やまざらんに〜かじ、こゝに至りてハ、貧富わくところなし、究竟ハ(ツハベハ)理即にひとし、大欲は(ウハベハ)無欲に似たり、

〔三二〕狐ハ人にくひつく者なり、堀川殿にて、舍人がねたる足を狐にくハる、仁和寺にて、夜本寺の前をとほる下(シモ)法師に、狐三飛かゝりてくひつきけれバ、刀をぬきて是をふせぐ間、狐二疋をつく、ひとつは突殺〜ぬ、二ハにげぬ、法師はあまた所くはれながら、とゆゑなかりけり、

〔三三〕四條黄門(隆資)命ぜられていはく、龍秋ハ(音樂ノ)道にとりてハやむごとなき者也、先日來りていハく、短慮の至、きハめて荒涼の事なれども、横笛の五の穴ハ、聊いぶかしき所の侍るかと、ひ

○狐ハ人にくひつく者なり　○四條黄門命ぜられていはく

をいふ雅好の心ハ是なる時も悦ぶべからざれとも人情をたすけて悦ぶべき事ハ悦ぶといへる也

左右ひろけれバ云々」心を用ふること寛大なれバ外物の爲に煩ハされぬたとへ也次の句も同意也

せばき時は云々」是ハ心をちひさく用ふるときハ物の爲に煩ハさるゝのたとへ也

寛大にして云々」心を用ふるに寛順大度なる時ハ喜怒の情其さはりとならずして常に身心安樂なるべき也

故に外物の爲に煩ハ

ろかに是を存ず、その故ハ、(二ツ目ノ)干の穴は平調、(三ツ目ノ)五の穴ハ、下無調あり、其(三ノ)間に勝絶調をへだてたり、(四ツ目ノ)上の穴双調、次に(四五ノ間)鳧鐘調をおきて、夕のあな黄鐘調あり、その次に(五六ノ間)鸞鏡調をおきて、(六ツ目ノ)中の穴盤渉調、(五ツ目ノ六ツ目ノ)中と(七ツ目ノ)六とのあハひに神仙調あり、かやうに間ゝに皆一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたずして、しかも(笛ノ穴ノ)間をくバると(余ノ夕中六等ノ穴ノ間クバリト)等き故に、その聲不快なり、されば此(五ノ)穴をふく時は必(ロヲ少シ)のく、(ロヲ)のけあへぬ時は(他ノ)物に(調子)あハず、吹うる人かたしと(龍秋ガ)申き、(其人)料簡のいたり、誠に興あり、先達後生を恐るといふ事、此事ありと(思ヒ)侍りき、他日に景茂か申侍しハ、篁ハ(調子ヲ)しらべおほせてもちたれバ、たゞ吹バかり也、笛ハ吹ながら息のうちにて、かつしらべもて行物なれは、(上ニ云ヘル六ノ)穴ごとに口傳の

ずと也

[三四] 秋の月ハ」秋ハ陰の時月ハ陰の精にて時節相應なればゞ清光限りなく愛すべき物と也

ころびおちぬやうに云々」前かどに手につかぬやうに油をもて拭ひてつかむ也

八幡の御幸」いづれの御時の御幸にや知らず是を尋ぬべし

[三六] 浄衣」白張裝束也

想夫戀」此樂の事源平盛衰記平家物語などに見えたり

相府蓮」平調の樂也北相府といふハ大臣の唐名なればゝ也

想夫戀も」相府蓮の事

○何事も邊土ハ賤く

上に、(天性風骨)性骨をくはへて、心をいるゝと、(五ツ目ノ)五の穴のみにかぎらず、(龍秋ガ笛ノ如ク)ひとへにのくとバかりもさだむべからず、あしくふけば何れの穴もこゝろよからず、上手ハいづれをも吹あハす、呂律の物にかなハざるは(フリ)人のとがなり、器の失にあらずと(景茂カ)申き、

[三三]何事も邊土は賤くかたくなゝれとも、天王寺の舞樂のみ、都に耻ずといへば、天王寺の伶人の申侍しは、當寺の樂は、よく(調子ノ)圖をしらべ合て、物の音のめでたくとゞのほり侍ると、外よりもすぐれたり、(ソノ)故ハ(聖徳)太子の御時の圖今に(存シ)侍るをはかせとす、(上ノ圖ニ)いハゆる六時堂の前の鐘也、その聲黄鐘調のもなか也、寒暑にしたがひて、(鐘ノ調子)あがりさがり有べき故に、二月(十五日中)涅槃會より、(廿二日)聖靈會までの中間を(ノ節ヲ)指南とす、秘藏のこと也、此一調子を

をいひ〜にちなみて又廻怨といふ樂のことをいへり

廻鶻國」北の胡國也大明一統志に長安を去ること八千一百里とあり

二七 平宣時」大佛陸奥守也北條五郎時忠後に宣時と改む

さりぬべき物」着になるべき物也

二八 鶴岡」鎌倉の八幡宮也

足利左馬入道」源義氏正四位下左馬頭法名正義法樂寺と號す時頼の一類也

隆辨僧正」鶴岡ノ別當也

女房ども」工女ども

もちて、いづれの聲をもと〳〵の〳〵へ侍るありと申き、凡鐘の聲は黄鐘調おるべ〜、是無常の調子、祇園精舍の無常院の聲おり、西園寺の鐘黄鐘調にいらるべ〜とて、あまた〳〵び鑄かへられけれども、かゐはざりけるを、遠國より尋出されけり、法(イ淨)金剛院の鐘の聲又黄鐘調なり、

〔三三〕建治弘安(後宇多院ノ年號)の比は、祭(加茂ノ)の日放免のつけ物に、ことやうなる紺の布四五端にて馬を作りて、尾髪にはとう〜みを〜て、蜘(シヲ)のいかきたる水干につけて、歌の意などいひて渡り〜と、常に見及侍〜なども、興有て〜たるこ〳〵ろにてこそ侍〜かと、老たる道志どもの、今日もかたり侍るなり、この比はつけもの年をおくりて、過差とのほかになりて、萬のおもき物を、お

二九 也

すべからず」可レ爲(ベカラ)かるの延言にて豫め爲すべき方法を立示すことにいへり而〜て下に多くいすべ〜とうくるを例とす

人間常住の思ひに」人は千年万年も此世に住めるものと覺悟して也

我をほろぼすべき云々」手前の貧になるいほろぶると同意也」

小要」小き要用也

耻にのぞむといふとも」物にはづる心あれば時にあたりて金銀をもつかふべき故に耻知らずになれと也

ほく付て、左右の袖を人にもたせて、みづからは鉾をだにもたず、いきつぎ苦〜む有樣いと見ぐるし〜、

〔三四〕竹谷の乘願房、東二條院(公子)へ參られたりけるに、亡者の追善には、何事か勝利多きと尋させ給ひければ、光明眞言(經)寶篋印陀羅尼(經)と申されたりけるを、弟子ども、いかにかくは申給けるぞ、念佛にまさるとさぶらふまじとは、など申給はぬぞと申ければ、(乘願房コタヘテ念佛ハ)我宗なれば、さこそ申さまほ〜かりつれ(サレ)ども、まさ〜く稱名を追福に修〜て、巨益有べ〜と說る經文を見およばねば、何にみはたるぞと、かさねてとはせ給はゞ、いかが申さむと思ひて、本經のた〜かなるにつきて、此(光明)眞言(寶篋印)陀羅尼を申つるなりとぞ申されける、

究竟ハ理即にひとし〜」天台宗の六即の中に究竟といふ妙覺の位にて如來地也理即といふ佛法の名字をも知らぬ凡夫体の至畜類まで佛性を具するをいふ也爰の意ハ尤究竟ハ理即にひとしきといへゞ右の長者のいへる如くに大欲なるハ無欲に似たるやうなれども畢竟の所ハ究竟と理即と譬りたるが如く大にちがひたるもの也との意を言外にいひのべたり

堀川殿」久我一門基具大政大臣堀川と號す

〔三三五〕たづのおほいどの（基家）ハ、童名たづ君おり、鶴をかひ給ひけるゆゑにと申は僻事おり、

〔三三六〕陰陽師（安倍）有宗入道、鎌倉よりのぼりて、（乘好ノモトヘ）たづねまうで來りしが、先さゝ入て、此庭の徒に廣きこと、淺まゝく有べからぬ事也、道をゝるものハ、う（稼）ゝるとを勤む、細道ひとつ殘ゝて、皆はたけにつくり給へと諫侍き、誠に少ゝの地をもいたづらにおかんとは益なきとなり、くふ物藥種などうゑおくへゝ、

〔三三七〕多久助（資）が申けるハ、通憲（信西）入道舞の手の中に、與有事どもを擇びて、いろの禪師といひける女に敎てまはせけり、白き水干にさうまき（カ）をさゝせ、烏帽子を引入たりければ、男舞と（初）ぞいひける、禪師（靜）がむすめゝづかといひける（モノ）この藝をつげ

本寺」野槌に本寺ハ仁和寺をいふべし云々是本堂の前といふ意にや爲抄に本寺とハ今の仁和寺より北の方に野あり本寺の舊跡たる故にや今も本寺野と號す此所なるべしといへりされど本寺の前とあれバ本堂の前と見たる方可なるべし

四條黃門」四條ハ稱號黃門ハ中納言の唐名也

龜秋」樂人の名也

命也られて」乘好にのたまへるなるべし」短慮の至きいめて云々」遠慮なき申事にてきいめて過言のこ

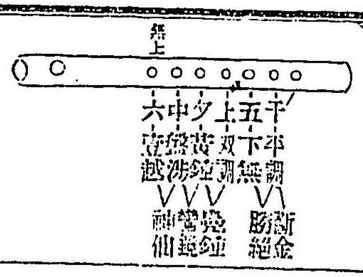
り、是白拍子の根源なり、佛神の本緣をうたふ、ろの後源光行多くのとを作れり、後鳥羽（八十八代ノ帝）院の御作も有り、龜菊にをゝへさせ給ひけるとぞ（イ）

〔三三八〕後鳥羽院の御時、信濃前司行長稽古の譽有けるが、樂府（ガフ）の御論義の番にめされて、七德の舞をふたつ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にゝて、學問（音樂ノ）をすてゝ遁世ゝたりけるを、慈鎭（慈圓）和尚、一藝ある者をば、下部までもめゝおきて、不便にせさせ給ければ、此信濃入道を扶持ゝ給ひけり、此行長入道、平家物語を作りて、生佛（シヤウブツ）と云ける盲目に敎てかたらせけり、さて山門のとを殊にゆゝくかけり、九郎判官（遲經）のとゝくゝく知てかきのせたり、蒲冠者（範頼）の

○たづのおほいどのハ　○陰陽師有宗入道　○多久助が申けるハ　○後鳥羽院の御時

となれゝ也

横笛之圖



平調」十二律之次第十一月壹越調十二月斷金調正月平調二月勝絶調三月下無調四月双調五月黄鐘調六月黄鐘調七月盤涉調八月盤涉調九月神仙調十月上無調一律をぬすめるに」一調子づゝへだてたるに也

料簡」料ハはかる簡ハにらぶの義にて道理をはからひ〜る事也

景茂」是も笛吹地下の樂人也

かつ〜らべもてゆく」かたゝへより調子を合せつゝゆく物なれゝと也かつの解ハ上巻七十四段にあり

性骨」口傳の外の器量といふ義なるべ〜」

呂律の物にかなはざる」上下清濁の調子の物にあはざるは也」

都に肝ずといへゝ」

衆好の天王寺の伶人にいへる也

はかせ」定規とする

とハよく〜らざりけるにや(アラン)おほ(ほ)くのことどもを〜る〜もらせり、武士のと弓馬のわざハ、生佛東國の者にて、武士にとひ聞てかゝせけり、かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師ハ學びたるなり、

〔三二九〕六時禮讃ハ、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集て造りて(昼夜六時ノ)つとめに〜けり、其後太秦の善觀房といふ僧、ふ〜はかせを定て聲明になせり、(法然ノ流義ノ)一念(一向專念)の念佛の最初なり、後嵯峨(代ノ帝)院の御代よりはじまれり、法事讃もおなじく善觀房はじめたるなり、

〔三三〇〕千本の釋迦念佛ハ、文永(亀山)のころ如輪上人是をはじめられけり、

七十八

〔三三一〕よき細工ハ少〜にぶき刀をつかふといふ、妙觀がかたなハいたくたゝず、

〔三三二〕五條の内裏にハ、妖物有けり、藤(原)大納言殿かたられ侍〜ハ、殿上人ども、黒戸(間)にて碁をうちけるに、御簾をかゝげて見る物あり、たゞどみむきたれバ、狐人のやうについ居てさ〜のぞきたるを、あれきつね(誰)よとよまれて、まどひにげにけり未練の狐ばけうんじけるにころ(アリケル)

〔三三三〕園別當入道(基氏)ハ、さうなき庖丁者なり、或人の許にていみじき鯉を出〜たりければ、皆人別當入道の庖丁を見ばやとおもへども、たやすく(無レ双)うち(言ニ)いでんもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、このほど百日の鯉をきり侍るを、今

○六時禮讃ハ　○千本の釋迦念佛ハ　○よき細工ハ　○五條の内裏にハ　○園別當入道ハ

意也博學にして人の師となる人をばかせといふよりおこる詞也

六時堂」晨朝日中日没初夜中夜後夜の六つの行をつとむる所也

あがりさがり」逐天にい鉦の音さに暑き時いねるむ也

聖霊會」太子の忌日也

指南とす」定規として十二調子を定むる也

祇園精舎」天竺にて釋尊の說法し給しの號也佛閣を精舎といふ也

無常院」祇園精舎の中の其一つ也

西園寺」拾芥に云衣笠山の艮太政大臣公經の家とあり

法金剛院」つき山の南太秦の東に舊跡あり一本に法の字を淨に作るあり淨金剛院い嵯峨の椎野にありといへり

放免のつけ物」萩原廣道云放免といふ非ある者を免しおきて使の廳の下部につかはる、者にて所謂放ち囚なり齋命抄に云つけ物といふ祭禮のわたりものに色々の出立をして身のかざりに物をつくる事也歌の意なといひて云

日（此處ニアリテ鯉キルヿ）かき侍るべきにあらず、まげて申請んとてきられけるい（ハ）みじくつきぐ〜く興有て、人ども（イミジト）れもへりけると、或人北山太政入道（公經）殿にかたり申されたりければ、（北山殿）かやうの事おのれいよにうるさく覺ゆるなり、（鯉ヲ）きりぬべき人なくば（此カヘ）たべき（給）らんといひたらむいなほよかりなん何でふ百日の鯉をきらんぞとのたまひたり（ハ）しをかしくおぼえしと人のかたり給ひけるいとをかし天かた（色々）ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたるとおり、まれ人の饗應なども、（何ニカカコツケテ）ついでをかきやうにとりなしたるも、誠によけれども、ただうのことゝなくてとり出たるいとよし、人に物をとらせたるも、ついでなくてこれを奉らんといひたる（ハ）まことの志

中の其一つ也

西園寺」拾芥に云衣笠山の艮太政大臣公經の家とあり

法金剛院」つき山の南太秦の東に舊跡あり一本に法の字を淨に作るあり淨金剛院い嵯峨の椎野にありといへり

放免のつけ物」萩原廣道云放免といふ非ある者を免しおきて使の廳の下部につかはる、者にて所謂放ち囚なり齋命抄に云つけ物といふ祭禮のわたりものに色々の出立をして身のかざりに物をつくる事也歌の意なといひて云

なり、（其物ヲ）をしむよしゝて（入ヨリ）こばれんとおもひ、勝負のまけわざに（請）とづけ（サリ）など〜たるむづかし、

〔三三四〕すべて人は無智無能なるべきものなり、ある人の子の見ざまなどあしからぬが、父のまへにて人と物いふとて、史書の文をひきたり（ハ）さかしくは聞にくかども、尊者の前にて（ア）い、さらずともおぼえにくなり、

〔三三五〕又或人のもとにて、琵琶法師の（平家）物語りをきかむとて、びはをめしよせたるに、ぢうの（柱）一つ落たりしかば、作りてつけよといふに、ある男の中に（身ザマ）あしからずと見ゆるが、古きひさくの柄ありやなどいふをみれば、爪をおふしたり、（コノ人ハ）琵琶おどひくにころ（ア山）めくら法師のびは、うのさたにも及ばぬとなり、（生）

○すべて人い無智無能　○又或人のもとにて　○萬のとがあらじとおもへ

々」古歌をうたひてわたる也古歌に「くものおにあれたる駒いつなぐとも二道かゝる人ハたのまし侍ゝかと」上にこゝろのかゝりありてゝの定りの一かのてにをはにて切れたるをとゝけてつゞけたり金葉八に「さこう見一かと人にかたるなとあるが如一

道志」明法道の輩の使聰の志となり右衛門左衛門の志となるを道志といふ也過差」衣服車馬等のかざり法令に過たる義也

竹谷」醍醐にあり

(此人カクイヘルハ琵琶ノ)道に心得たるよ一にや(どかたハらいたかりき、ひさくのにハ、ひも(師)の(ツカフ)木とかやいひてよからぬもの(ナル)にとぞ、ある人仰られ一、(恰物)若き人はすこ一のともよくみにわろくみゆるなり、

〔三三六〕萬のとがあらじとおもはゞ、何事にも誠ありて、人((其人)をわかずうや一く一く(シテ)、言葉すくなからんには一かじ、男女老少不別皆さる人こゝろよけれ(サレ)ども、ことに若くかたちよき人の、言うるハ一きは、忘れがたく思ひつかるゝ物なり、萬のとがは、馴たるさまに(我コソト)上手めき、(物事)所にたるけ一き一て、人をかいが一ろにするにあり、

〔三三七〕人の物を問たるに、(共人必ズ)一らず一もあらじ、有のまゝにいはんはをこがまゝとにや(アラシ)、心まどハすやうにかへりごと一た

東二條院」人皇八十八代後深草院の后公子也

稱名」彌陀を唱ふることなり

たゞのおほいとの」九條前内大臣基家公也鶴殿と號す田鶴といふ田の字にハ意なし

有宗入道」安倍晴明十五代の孫陰陽頭安倍有宗也

多久助」舞人也多ハ氏也

通憲入道」少納言入道信西也諸道に通せ一人也

いうの禮師」義經の妾静が母也

さうまき」さやまき

る(ハ)よからぬ事なり、(タトヘ)一りたることも猶さだかに(セン)と思ひてや問らむ、又(始メヨリ)實に一らぬ人もなどかおからん、うら一かにいひきかせたらんハ、おとな一く聞になま一、(問フ)人はいまだ聞及ばぬとを、わが一りれるまゝに、さても其人の事の(コレホドノコナ知ラス)淺ま一さおどばかりいひやりたれば、(問フ人ノ)いかなることのあるにか(ラシ)ど、おー返一とひにやるこゝろ(問ル人ノ)心つきなけれ、世に(事)ふりぬるとをも、おのづからきゝもらす(イあたり)かたもあれば、(問ヒタル人ノ)覺束なからぬやゝに告やりたらん(ハ)あ一かるべき事かは(アシカルベキコニハアラシ)、かやうのとハ、ものなれぬ人の有となり、

〔三三八〕ぬ一ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入くる事な一あるじなき所には、道行人(漫ユキ)みだりに立いり、狐梟やうの物

○萬のとがあらじとおもハゞ　○人の物を問たるに　○ぬ一ある家にハ

也常の打刀の柄と鞘とを絲にて卷きたるものにて即ち古へいとまきの太刀といひしもの也とぞ
佛神の本緣」本緣は山來緣起也
源光行」後鳥羽院の北面土岐左衛門尉光行也
鶴潟」後鳥羽院御簡愛の舞女也
稽古の樂」稽古は古へを考へ知たる義なれがうれより轉して爰にては音樂の名を得たるをいふ也
樂府の御論義の番」白氏文集三四卷に載たる新樂府也其中に不審あるを問答す

も、人げにせかれねば、所にがほに入すみ、こたまなどいふけ氣
〜からぬかたちもあらはるゝものなり又鏡には色かたちなき故に、萬の影來りてうつる、鏡に色かたちあらまし〜かば其影
つらざらまし〜、虛空よくものをいる我らが心に念々のほ〜入欲トイフ
きまゝにきたりうかぶも、心といふものゝなきにやあらん
心に主あらまし〜かば、胸のうちに若干のとは入きたらざ
まし〜、

〔三三九〕丹波に出雲といふ處あり、大社をうつ〜てめでたく造出雲ノ
れり、〜だのなにが〜とかや〜る所なれば、秋の頃聖海上人氏 云ヘル人ノ 知行所
うの外も人あまたさうひて、いざ給へ出雲をがみに、かいも
ちひめさせむとて、ぐ〜もていきたるに、各拜みて、ゆ〜く引 キコシ

る人數に加るを御論義の番といふ也樂府といふ文體明辨に樂官肆習ヘル之樂章也といへり
七德の舞」白氏文集三新樂府の最初にあり此舞初は破陣樂の舞といひ〜を後七德の舞と名付〜也
冠者」元服せ〜人をいふ
慈鎭和尚」天台の座主也
六時禮讚」書の名
太秦」山城國嵯峨の邊にある廣隆寺なり
ふ〜はかせ」節は學の上下はかせといふ學のほど也
學明」三藏法數注ニ

信おこ〜たり、御前なる獅子狛犬、うむきてう〜ろさまにたちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや、此〜〜のたち樣いとめづら〜、深き故あらんと涙ぐみて、同道ノ人々ニ向ヒいかに殿原、殊勝のことは御覽じとがめずや、無下おろかといへば、各あや〜みて、狛犬ノ面ヲヤまことに他にとなりけり、都のつとに語らむおどいふに、上人猶ゆか〜がりて、おとな〜く物〜りぬべき顏〜たる神官をよびて、此御社の獅子の立られやう、さだめて習ひあるとに侍らん、ちと承らばやといはれければ、うの事に候さがなき童部どもの仕りける、寄怪に候と也とて、さ〜よりて惡
するなほ〜ていにければ、上人の感涙いたづらになりにけり、

○丹波に出雲といふ處あり

五明ノ第一ノ摩明ヲ一曰摩ハ即摩敬明ハ即明了とあり
法事讃」上下兩卷あり

三三〇 千本の釋迦念佛」千本の釋迦堂にて二月九日より十五日迄遍敬經を讀よみに〜終りに釋迦の名號を唱ふる五也

三三一 妙觀」播州勝尾寺の觀音の像をさざみ〜人也

三三二 五條の内裏」後醍醐の皇居といひ傳へたり
殿上人」解上卷八十一段にあり
黒戸」百七十六段に見にたり

〔三四〇〕柳筥にすうる物ハ、たてざまよこざま物によるべきにや（アラン）卷物おどい竪ざまに置て、木のあハひより紙捻りを通〜てゆひつく、硯もたてざまにおきたる（ハ）筆ころばず（テ）よ〜と、三條右大臣殿仰られき、勘解由小路の家の能書の人々ハ、假にも竪ざまにおかるゝとな〜、かならずよこざまにすゑられ侍りき、

〔三四一〕御隨身近友が自讃とて七箇條かきとゞめたるとあり、皆馬藝（ニテ）、させることかき事どもなり、うのため〜を思ひて、（自讃セ）讃のと七あり、

一人數多つれて花見（イニ）ありき〜に、最勝光院の邊にて、をのこの馬をは〜ら〜むるを見て、今一度馬をはするものならバ、馬たふれて落べ〜、〜ば〜見たまへとて立とまりたるに、又馬をはす、とゞむる所にて馬を牽たふ〜てのる人泥土の中にころび入る、うの詞のあやまらざるとを人みかゝ感ず、

一當代（後醍醐カ光明院カ）いまだ坊（東宮）におは〜ま〜ゝ比、萬里小路殿（里ノ）御所おり〜に、堀河大納言（師信）殿伺候〜たまひ〜御ざう〜（曹司）へ（用有（兼好ガ）て參りたり〜に、論語の四五六の卷をくりひろげ給て、唯今（東宮ノ）御所にて、紫の朱うばふとを惡むといふ文を御覽ぜられたき事有て、（春宮ノ）御本を御覽ずれとも、御覽じいだされぬ也、猶よくひきみよと（東宮ノ）仰ごとにて求るなりと仰らるゝに、九のまき（鳴貨篇）のうこ〜のほどに（見エ）侍ると申たり〜かば、（大納言殿）あなうれ〜と

ついゐて」解上卷四十二段に見にたり
圓別當入道」葉氏卿也天福二年十一月十七日出家す圓ハ稱號也別當ハ檢非違使の別當に任じられ〜故也

三三三 百日の鯉」百日つゞけて鯉を日に一づゝきる修行をするにといふ意也
つきぐ〜き」解上卷十段に見にたり
北山太政入道殿」西園寺公經公也一條相國とも申き
何條百日の云々」何と〜て百日の鯉をきるべき虚言めきたりとの義也

○柳筥にすうる物ハ　○御隨身近友が自讃とて

すべて人い云々」人のもとより智もなく能もなきがよ〜といふにはあらず少智少能をはなにあて、それをさ〜はさむ故にさやうにあらんよりハ無智無能なるもののやうにあるべきと也

見ざまなど云々」見さまといかたち行跡などのよき也それにても智恩だて〜たるか猶見苦〜きと也

ちう」紋をのする木也

古きひさ〜の柄云々」提琶の柱にけづらんとおもひて才覺だてをする也

て（奉宮ノ御前ヘ）もて参らせ給ひき、かほどのと（ヨ曇ユル）ば、兒ども、常のとなれど、昔の人はいさ、かの事をも、いみじく自讃〜たる也、後鳥羽院の御哥に、袖とたもと、一首のうちに（ヨミテハ）あ〜かりなんやと、定家卿に尋おほせられたるに、

秋の野の秧か花す、きほに出てまねく袖と見ゆ

らんと侍れバ、おに（イカハ）どか（テシク）さふらふべきと申されたりける（イたる）とも、時に（勅問ノ）あたりて本歌を覺悟す、道の冥加あり、高運也おど、ことでと〜く〜る〜（定家卿）おかれ侍るあり、九條相國伊通公の欵狀（クワンヂヤウ）にも、とあるとあるき題目をも、書のせて自讃せられたり、

一常在光院のつき鐘の銘へ、在兼卿の草あり、行房朝臣清書

め〜ら法師のびは云々」座頭の琵琶などハ樂人の琵琶と同じ日に許定〜がたし〜と也琵琶の柱ハ古き槍をよ〜とすと雖座頭されのにハ何にても苦〜からぬとの意也」うら、かに云々」問人の耳にた、ぬやうのをやかなるさまにいひきかせたるがよきと也

心づきなけれ」一度にてすむやうのを向ひの人の又二度問ひくるやうにいひやるハ問る、人心なき事と也

さ云ま」是ハもと其形なくて聲をなす樂

〇御臨身近友が自讃とて

〜て、いかたにうつさせむとせ〜に、奉行の入道かの草を取出て（兼好ニ）見せ侍〜に、花の外に夕を（ツケ）送れば（鐘ノ）聲百里にきこゆといふ句あり、（此銘ノ全句草字ノ）陽唐の韻とみゆるに、百里（ノ里ハ仄字ナレバ）あやまりかと（答カ）申たり〜を、能ぞ（ソナタニ）見せ奉りける、おのれが高名なりとて、筆者（在兼卿）の許へ（奉行ノ入道）言やりたるに、あやまり侍りけり、數行（スウ）と直さるべ〜と返事侍りき、數行もいかゝるべきにか（ナラン）若數歩の心か覺束なし、

一人（兼好）あまたともなひて、三塔巡禮の事侍〜に、横川の常行堂のうち（ニ）龍花院とかける古き額あり、佐理成行の間疑ひありていまだ決せずと申傳たりと、堂僧（守リノ）とぐ〜く申侍り〜を行成ならば裏書有べ〜、佐理ならばうらがき有べか

をいへれどこゝにてハけゝからぬ形もあらはるゝとあればなほけ物の意なるべし「虚空」物なき所即ち上にいふ家に主なきと鏡の中の空なるとを結びていへり

丹波に出雲云々」桑田郡瓢山今いふ瓢岡の北にあり

かいもちひ云々」田舍なれば結搆なるもてなしい得すまじきと界下の詞也かいもちひハ擬餅也

とがめずや」此やゝ問ひかゝる意のやにて切れたり故に上の受くる處も切るゝ詞也是をかといふにはとがめぬかといひて切るゝが定りなり

柳筥」硯短冊或ハ鞠冠又追善の時に經卷等をすうる臺也柳にて作る一尺四方ありこれ是ハ古へハ宮にて紙筆をいれもし上におきて歌の會などにいとたよりよきものなるを後に臺にかへたる也と松の落葉に見にたり

柳筥之圖

らずといひたり〜に、裏ハ塵つもり、蛛の巣にて、いぶさげなるを、よくハきのごひて、おの〜見侍〜に、行成位署名字年號さだかにみゆ侍〜かば、人みな興にいる、

一那蘭陀寺にて、道眼聖談義せ〜に、八災といふ事を忘れて是やれほゆ給ふ（誰カ）と（聖ノ）いひ〜を、所化みな覺にざり〜に、局（ツボネ）の内よりこれ〜にや（アラシ）と（乗好）いひ出〜たれば、（聖）いみじく感じ侍りき、

一賢助僧正に伴ひて、加持香水を見侍〜に、いまだいてぬほどに、僧正歸りいで（ナシ）侍〜に、陳（座）の外まで僧都見ゆず、（僧正）法師どもを返〜てもとめさするに、おなじさまなる大衆多くて、にもとめあハずといひて、いと久〜くて出たり〜を、（僧正）あなわび〜、ろれもとめておハせよと（乗好ニ）いハれ〜に、かへり入てやがて（右ノ僧都ヲ）ぐ〜ていでぬ、

一二月十五日月あかき夜うちふけて、千本の寺にまうでゝ、うゝろ（堂）より入て、ひとり顔ふかくかくゝて（遺教經ヲ）聽聞〜侍〜に、優なる女の、姿にほひ人よりとなるが、分入て（乗好ノ）膝にゐるかゝれば、にほひなどもうつるばかりなれば、びんあ〜と思ひてすりのきたるに、猶居よりておなじ樣なれば、（便）（ソコヲ）たちぬゝうの後或御所ざまの（年）ふるき女房のうゝろごといはれ〜ついでに、（ソナタハ）無下に色（カ）おき人にれは〜けりと、見おと〜（浸言）奉るとおむ有〜、情な〜と恨奉る人なんあると、の給ひ出〜たるに、（乗好ハ）更にこゝろ心得侍らねと申てやみぬ、此と後にきゝ侍〜ハ、

勸解由小路」世尊寺

○衛隣身近友が自謙とて

なり行成の子孫にて代々能書の家也
最勝光院」拾芥云法性寺建春門院（行二落字一歟）
御所なり〜に」里の御所なるべ〜帝宮の此時にはせ〜所也
御さう〜」官人女官等の用部屋局をいへり爰ハ方里小路殿の内にある休息所の部屋なるべ〜
紫の朱うばふをを云々」論語陽貨篇にあり
一首のうちに云々」上句と下の句とによみては也
秋の野の云々」古今秋上に見にたる在原

かの聽聞の夜、御局のうちより（或）人の（愛好ヲ）御覽じ〜りて、（御側ニ）さふらふ女房をつくりたて〜いだ〜給ひて、びんよくば（但）詞などかけんものぞ、うの有さま參りて申せ、興あらむとてはかりたまひけるぞ、

〔三四三〕八月十五日九月十三日は婁宿なり、この宿清明なるがゆゑに、月を翫ぶに良夜とす、

〔三四三〕〜のぶの浦の蜑のみるめも所せく、くらぶの山ももる人〜げからんに、わりなくかよはん心の色こそ、淺からずあれと思ふふ〜ぐ〜の、わすれがたきとも多からむ、おやは（親ト同）らから（ナドノ）ゆる〜て、ひたふるに（妻ト）むかへすゑたらん（ハ）いとまばゆ（差明）かりぬべ〜、世にありわぶる女の、にげなき老法師あや〜の

棟染の歌也歌の意ハす、きのほの風でなびくのハてうど人が色に出て戀〜い人を招く袖のやうに見ゆるがす、きのほハ秋の野の惚妹の草の袖か〜らぬと遠鏡に見にたり
道の冥加」冥加ハ神明の加護をいふ道ハ歌道なるべ〜
歌狀」禁中へ官位なと望み申時の申狀也
音〜わんなれども〜わとよむ
常在光院」相國寺の末寺也舊跡東寺にあり
在飛卿」參議正二位菅原家也

あづま人なりとも、（手前ノ）賬ハ〜きにつきて、さうふ水あらば（ユカ）おど（田舍）いふを、おかうど（女ノ）何方も心にくきさまにいひお〜て、〜られず〜らぬ人（中人）をむかへもて來たらん（ノ）あいおさよ、（何事をか（ソノ様ノ人ニハ）打出るとのはにせむ（コノ）年月の（不自由ナル）つらさをも、分こ〜ハ山なども

あひかたらハんころ、尽せぬ言のはにてもあらめ、すべてよ所の人のとりまかおひたらん（ハ）うたて心づきなきと多かるへ〜（ムカヘクル女ガ）よき女ならんにつけても、品（格）くだり（轉）、見にくく年もたけなん男ハ、かくあや〜き（ワガ）身の爲に、あたら（ワカキ女ノ）身をいたづらになさんやハ（ナシハセジ）と、（ソノ）人（女）も心れとりせられ、我身は（其女ト）むかひゐたらむも、影（オモ）はづか〜くれぼにはなん（ハ）いとところあいおからめ（愛）、梅の花かうば〜き夜の朧月にたゝずみ、みかき（御垣）が原の露分いでん有

○八月十五日九月十三日は婁宿なり　○〜のぶの浦の蜑のみるめも

行房朝臣」世尊寺行成卿の末孫
花の外に云々」鐘の音の花の外に聞にて遠く夕をつげ送る意なるべし
敷行」行の字庚韻にも陽韻にもいれり庚韻にては行歩の義陽韻にては行列の義也こゝにて敷行を敷歩の義にとらば庚韻なるべし然るに此鐘の銘は陽韻なれば庚韻にては覺束なしと也」三塔順禮の事」東塔西塔横川の三塔の諸堂を拜みめぐる也」常行堂」今東塔の根本中堂のあたりに戒壇堂とむかひてたてるが常行堂也といへり
龍花院」常行堂の堺内なる院にて即ち横川の一院の名也
佐理」參議藤原佐理卿也一條院の時の能筆の人也
行成」權大納言行成卿也世尊寺と號す能書の家也一條院の時の人也
位署」姓名の上に官位をかき連るを位署といふ
那閣陀寺」百七十九段に見にたり
八災」憂苦喜樂愛憎出息入息之を八災といふ此八つゝ修行得道にさはりとなるが

明の空も、我身ざまにしのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ、

〔三四四〕望月のまどかなるとはしばらくも住せず、やがてかけぬ、心とゞめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまも見みぬにやあらむ。病のたもるも、住する隙なくして死期すでにちかし、されどもいまだ病急ならず、死におもむかざるほどは、常住平生の念に習ひて、生涯の中におほくの願事を成じて後、閑に道を修せんと思ふ程に、病を受て死門にのぞむ時、所願一事も成ぜず、いふかひなくて、年月佛道修行の懈怠を悔て、此度もしたちなほりて命をまたくせば、夜を日につぎて此と彼とおこたらず成じてんと願全をおこすらめど、やがて病おもりぬれば、

我にもあらずとりみだしてはてぬ、此たぐひのみこそ世間あらめ、このとまづ人々いろぎ心得に死れくべし。所願を成じて後、いとまありて道にむかはんとせば、所願つくべからず、如幻の生涯の中に何事をかなさん、すべて所願みな妄想なり、所願心にきたらば、妄心迷亂すと知て、一事をもなすべからず、直に萬事を放下して、道にむかふとき、さはりなく所作なくて、心身ながくしづかなり、

〔三四五〕とこしなへに違順につかはるゝ事は、ひとへに苦樂の時なり、樂欲する所一には名なり、名に二種有、行跡と才藝との譽なり、二には色欲、三には味なり、萬のねがひこの三にはまどかなるとい　○とこしなへに違順に

故に災といふ也
所化」師ハ能化といひ弟子をバ所化といふ
賢助僧正」醍醐三寶院也日野家の人也
加持香水」是ハ口に明呪をとなへ手に印をむすびて金剛杵にて水を加持〜て散杖をとり行者を加持する也其法式密法なれバ紙に記〜がた〜天台眞言の両宗禁裏にて御修法の時之を行ふ事也と參考抄に見にたり
陳の外」抄云禁中の陳の座の外までなり清涼殿の西にありとぞ

〜かず、是顚倒の相(イ思)よりおこりて若干のわづらひあり、(所願ヲ)もとめざらんには〜かじ、

〔三四六〕(兼好)八に成〜年、父に問て曰、佛はいかなる者にか候らんといふ、父がいはく佛には人のなりたるなりと、又とふ、人は何と〜て佛にはなり候やらむと、父また佛のを〜へによりてなる也とこたふ、又とふ教候ひける佛をばなにがを〜へ候ひける、又答ふ、うれも又さきの佛のを〜へによりてなり給ふなりと、又とふ、其を〜へはじめ候ひける第一の佛ハ、いかなる佛にか候ひける、といふ時、父空よりや降りけん、土よりやわきけんといひてわらふ、問つめられてこたへずなり侍りつと、諸人にかたりて興じき、

●千本の寺に云々」釋迦堂也二月十五日ハ遺教經の法事なるべ〜又涅槃會ともいふ也　●びんよくば云々」兼好風流の隱者なれば便宜よくた詞をもかけんものぞと也　〔三四三〕夏宿」夏ハ廿八宿の一也西方にあり此宿秋に屬〜金に屬〜たれバ清明の義尤なり　〔三四三〕〜のぶの浦」奥州に信夫郡あり此發端の詞ハ人を〜のぶといはんため也　●蜑のみるめ」蜑ハ海松和布(ミルメ)なと刈者なれバ其みるめの所狹〜多〜といふを忍びてかよいんとするも人目にせかれてさはりとなるといふ意にいひかけたる也　●〜らぶの山も云々」山城にある名所也山には山守あるを暗き通路なとを忍び入ちんとするも守り目〜げからんにといひかけたる也　●あづま人」田舍人といはんが如〜あながちに東國をさすにはあらず　●あいなさよ」愛想なきこよと也　●年月のつらさをも」是より發端の意を立かへりいふ也彼みるめ所せく守人〜げくて自山ならざり〜年月のつらさ也　●分こは山」新古今戀一に頂之『筑波山はやま〜げ山〜げ、れを思ひ入にいさはらざりけり』とあり爰にひく意ハ此の如くに人目〜げき所をも〜ひて通ひきてあひ見る事なとかたらふさま也　●人も心おとりせられ」彼にぎは、〜きにつきて我妻となり來たる女の心を男の方より思ひおとす也　●梅の花のかうバ〜き云々」梅の花のさき匂ひたる夜業平の五條の西對の春の曙月にたゞずみ二條の后にこゝあひ〜ことを嘆き〜やうの女の方よりも〜のゐるべき身か又いみかきが原を源氏のわけいで來搖花のもとへゆき有明の頃中將とたゞずみ給ふやうの女に〜のバるべきこの二人の如くならでかゝる艷なる折も女の方より我身ざまに〜のバる、やうにもあらぬあや〜の東人老法師なとの類ハ色好まぬに如じと也　一說に此所業平源氏の故事にも及バず梅の花のかうバ〜き夜みかきが原の有明の空なと好色に艷なる折ふ〜我身のさまにも似あはで忍びありくべくもなからん人ハとなり尙よく考ふべ〜みかきが原ハ大和の名所也されと源氏の故事ハ禁中の事なるべ〜　〔三四四〕如幻の生の中に」まぼろ〜の如き一生涯の中にと也　●所作なくて」無爲自然の姝也　〔三四五〕違順につかはる、云々」違ハ我心に違ふ苦也順ハ我心に順ふ樂也此苦を去り樂に就んが爲に一生心身をつかいる、也　●顚倒の相より云々」さかさまの想ひ也佛心と凡夫心とハ好みおもふ事さかさまなるもの也例へバ佛菩薩の目より苦みと見ゆるこも衆生ハ樂みと思ふが如〜されバ佛と衆生とハ其思ひうらおもてなるより違順につかいる、ものにて畢竟ハ佛の道に〜たがはねバ此わづらひハまぬかれがた〜といふ意也

〔三四六〕佛には人のなりたる」淨飯王の御子悉達太子十九出家三十成道〜給へり　●佛のを〜へによりて」檀特山の阿羅々仙人のを〜へによりて也　●空よりやふりけん土よりや云々」佛の先をとひ〜〜てか〜いひのこ〜たるバ自已の工夫にて

得道成就させん爲也といへり

標註 徒然草新釋 終

徒然草新釋備考

弘人云是は普通の注釋に未だ見ざる所にして讀者の參考にもと思へるものをかき集めたる也

○つれ〴〵草の大意

安齋小說に云貞丈按するにつれ〴〵草の抄物世に多し其注釋を書ける人多くいかのれ〳〵が好める道に引おとして說をなせり其說々かいりめありといへどもいづれも兼好の心ハ人の爲にをしへをほどこせる書ありとする事は皆同じいづれもかたくなにひがめるなるべし兼好ぜこのさうーをかける主意ハつれ〴〵なるまゝにHくらー硯にむかひ心にうつりもくよーあー事をかきつくるといへるを以て考べし兼好のあながちに人の爲にせんとてかけるにもあらずつれ〴〵なるまゝに心に移りもくにまかせて思ひよれる事をきのふもかきけふもかきあつめてつれ〴〵にさびーきにこれをなぐさみとせしなり心に移りもくまゝに記せー事あれバ心ざすところ一道ならず神道もあり儒道もあり老莊の道もあり佛道もあり歌道

もあり樂の道もあり朝廷の政事もあり武道もあり好色の事もあり無上の歌談もあり心にうつりもくとはこれをいへる也今こそはこのさうし世にもてはやせ兼好このさうしかけるときかくあるべーといよも思はじたゞ無心にーて何とおくかきすさびしあり今の世に至りて是をもてはやすにつけて註釋をつくる人强て人の爲教訓の助に書けるなど云は兼好の本意にいあらじ只兼好の隨筆おりと見るべし强て人の爲教訓の書とおーて說くやゑ好色のとなどかける章に至りて教訓にあらざるもゑ樣々にむつかしき說をのべてまげて教訓の事に說きさもなき事をかける章をゞさもなきやうにすなはにやすらかにこそとくべき事なれすべて抄物かく人のくせにてその本書の作者をあまりにはめすごしその書をあまりにたふとくいいんとて强て事をひきそへなどするよりその作者の本意とたがひたる事も出てくる事あり つれ〴〵草三箇の大事などいふとも兼好のかけるにい秘事にてもなき事おれども今の知る人のすくなきもゑ秘事とするあるべし人の多く知らぬ事をば人にもかくさず知らせ置おゞ誰もかも知りて末の世までもたえず傳りぬべし人の知らぬ事をおのれのみ知りたりとてひとりほこり惜みかくすいよき志にいあらず名をもとめ利を貪るの爲とこそ思いるれ

○百廿二段に云鎌倉の海にかつをといふ魚い云々

蒹葭堂雜錄に云隱解の論に云此章堅魚の事をいひて古今の變俗をのぶるといへども全く堅魚の事をいひて堅魚の事にあらざるおり夫堅魚い諸州にありて別して土佐を上品とせりよく〳〵考ふるに鎌倉とさしつけたるい詞によりて見れば鎌倉武士をさーて堅魚といふと見えたり當時太平記の亂にて武家威勢を振ひ帝位を犯ー給ふとを歎きて堅魚に比してかく云おらん万乘の君といへども世の盛衰のがれ難きとをあらはして衆人の盛衰歎くまゝとの教也尤兼好其世にあれば繁昌の武家を批議せしむるとい愼の第一なるもゑ堅魚にとよせて己む事を得ざるの情を述る也蓋鎌倉の海に堅魚といふ魚い彼さかひにいさうなき物にて此頃もておす物也とい鎌倉武士い彼鎌倉の境地において威勢をふるひ無双のものにて今頃天下の人々も持賞すもの也と當時の盛なるを擧ての詞也夫も鎌倉の年寄の申侍りしとい人の物語になして兼好みづから意趣を述るなり此魚おのれら若かりし世迄いはかゞしく人の前へ出る事侍らざりきとい今繁昌の武士ども己等若年の時までいはかゞしく決斷ーて上

朝家の前へ猥に出る事は侍らざりしにと也頭い下部もくいず切て捨侍りし物也と申きとは頭といふい相摸入道をさーて云おらん此入道甚無道にして放逸無悪のふるまひなる故天下の人恨を結び終にい天の罰をうけ尊氏義貞赤松など倶に起りて謀倉南六波羅を打破りしゐり頭たる入道の命令を聞うくる者おく下部に至るまで入道の下知を甘く喰ざる故罪きいまりて切て捨侍りーとの物語也とぞかやうのものも世の末になれば上さまさまでも入立わざにこそ侍れと是兼好年寄の物語を受て意を述られし也抑相模入道悪逆日々に長じ天下の大戮と成て尊氏義貞之を亡し一旦天下一に定らんとせー時又尊氏の勢ひ強くなりて大塔の宮をはじめ其外宮方を押こめ終に後醍醐天皇を追奉るこれに依て新田楠暫く支ふるといへども御運つたおく御方の兵士悉く亡び帝の御勢ひおとろへさせ給ひ尊氏の勢ひ日々に募り鎌倉はいふに及ばず京師を犯し上さま迄入立事に成侍ると也此入立わざにこそ侍れとの一句を味ふ時は全く堅魚の事おらざるを知るべー肉食の事のみおらば入立といはずとも外に書様もあるべー入立との一句にて武門の帝土に入立て我意をふるひ天下に令を出し王命いつとなく消衰へたる事をなげきての文法也

明治廿六年一月十日印刷
同　年一月十五日出版
定價二拾錢

標注者　京都市上京區仁王門通新丸太町六番戸寄留　渡邊弘人
發行者　京都市上京區御幸町通姉小路上ル大文字町八番戸　藤井孫兵衛
發行者　京都市下京區寺町通四條上ル大文字町十八番戸　田中治兵衛
印刷者　大阪市東區本町壹丁目卅番屋敷大阪國文社員　近藤堅三

賣捌書肆

東京　大倉孫兵衛
仝　吉川半七
仝　水野慶二郎
仝　三省堂
仝　丸善商社
仝　目黒書店
大阪　松村九兵衛
仝　柳原喜兵衛
仝　梅原龜七
仝　岡島眞七
仝　青木嵩山堂
仝　中川勘助
横濱　里見亨太郎
仝　丸屋書店

名古屋　川瀨代助
仝　片野東四郎
神戸　熊谷久榮堂
仝　郁文堂
熊本　長崎次郎
鹿兒島　吉田幸兵衛
高知　澤本駒吉
出雲　園山喜三右衛門
富山　中田書店
加賀　池善平
福井　岡崎左喜助
仙臺　高藤書店
函館　魁文社
江差　二八社

184
35

187
35

095839-000-7

187-35

徒然草新釈（標註）

渡辺　弘人／注

M26
DBR-0047